

軍事郵便に見る兵士と戦場論

山辺昌彦

The Soldier and the Battlefield, as Seen in Military Mail

- ①はじめに
- ②軍事郵便に書かれた戦場
- ③おわりに

【論文要旨】

この論考は、高橋峯次郎あて軍事郵便の分析の一環として、中国との戦争に参加した兵士が戦場で何をしたか、また戦争をどう考えていたかを、軍事郵便から明らかにすることが課題である。従来の高橋峯次郎あて軍事郵便の研究は、農民兵士の視点から戦場の中国農民の生活をどう見ていたかに重点が置かれていた。そのため日本の中国との戦争の遂行を担った兵士としての側面を明らかにすることが残されてきた。

従来、軍事郵便は検閲のために真実を書けないと考えられてきたが、最近、軍事郵便から侵略戦争の加害の事実を明らかにする、静岡県浅羽町の軍事郵便を使った小池善之氏の研究がでている。この成果をより豊かにすることもこの論文の課題である。

論文では、高橋徳松・千葉徳右衛門・菊池清右衛門・石川庄七・高橋千太郎・高橋徳兵衛・菊池八兵衛・加藤清逸の軍事郵便に書かれた戦場の様子を紹介している。

戦闘の様子では、日本兵が女性・子供を含む中国住民や捕虜・敗残兵を殺し、住民

の家を焼き、その財産を略奪していることが見られる。一方で蔑視していた中国軍が住民との結びつきを強め、強固に抵抗していることも見られる。また、日本軍の攻撃・爆撃により廃墟になり死体が放置されている都市の様子、日本軍が軍事力で占領地支配を維持しており、日本軍のいいなりになる政権をつくり、植民地と同様に日本化している様子も見られる。さらに毒ガス戦の準備の様子も見られる。このように、農民兵士の軍事郵便からも、日本の中国への戦争が侵略戦争であり、それが中国の人びとに多大な災難、損害と苦痛を与えており、戦争犯罪もあつたことがわかる。

農民兵士は日本軍の戦争を正当化するイデオロギーを疑うことなく受け入れており、中国兵の殺戮などを面白がっており、中国人を悲惨と思い、日本人に生まれたことを喜び、戦争に負けてはいけないという考えを持っていることも、軍事郵便から読み取れる。

①はじめに

1 課題の意義

この論考の課題は、高橋峯次郎あて軍事郵便を通して、日本の中国との戦争に参加した兵士が戦場で何をしたか、何を見たかを明らかにしようとするところにある。それは、従来の菊池敬一著『七〇〇〇通の軍事郵便―高橋峯次郎と農民兵士たち』、岩手・和我がのペン編『農民兵士の声―七〇〇〇通の軍事郵便から』などの、高橋峯次郎あて軍事郵便の研究が、農民兵士という視点から、農民として戦場となった中国の農民の生活をどう見ていたかに重点が置かれていた。その意味では日本の戦争の遂行を担った兵士としての側面を明らかにすることがあまりなされていないので、課題として残されている。このことはとりわけ、日中戦争において、日本軍は中国の人びとに何を与えたか、そのことを農民兵士はどう考えていたか、を軍事郵便から読みとることである。

従来軍事郵便は、手記や日記などに比べても、検閲があるため、真実を伝えられないと考えられてきた。しかし、最近の研究では、軍事郵便にも侵略戦争の加害の事実が書かれていることが明らかになってきている。その代表的な研究は『浅羽町史』であり、その資料編三には、小池善之氏の解説により軍事郵便が収録され、『静岡県近代研究』第二四号には小池善之著「南京事件を追う―軍事郵便の中の日中戦争」が掲載されている。ここでは、その内容を先行研究として紹介し、確認しておくたい。

まず第三師団第二陸上輸卒隊の兵士の一連の手紙が紹介されている。天津からの手紙では「毎日便衣隊が我々の手に取られるのですが、道路上で皆銃殺志て終ます⁽¹⁾」、一九三七年一〇月の保定の手紙では「残兵

狩に出て居ます。……毎日五人や十人くらい殺して帰ります。中にわ良人も殺しますが、何分気が立っているので居る者は皆殺します。哀れな者さ支那人なんて。全く虫だね⁽²⁾」、南京占領後の手紙では「去年の三十一日まで支那兵の捕たのお、毎日揚子江で二百人づつ殺したよ。川に手おしぱって落して置いて上から銃で打ったり、刀で首お切ったりして殺すが、亡国の民は実に哀れだね。まるでにわ鳥でも殺す用な気がするよ。十二月二十七日の夜は、兵站部に食糧お盗に來たので、七人捕て銃俵で突殺したが面白い物だったよ⁽³⁾」「平和になった南京市には毎日市民が続々帰って来るよ。来ても□ね。夜が来ても寝る所も無し。此の寒さにふるえて死んで行く者も一日に何百人ですよ。哀れな支那人ですね。敵国人で有りながら哀れだね。町の実況や市民の哀れな姿なぞ内地の人々に見せてやっつて、□戦敗したる国人の哀れお見せ、日本国土お強くせたいと思ふ⁽⁴⁾」「もふ支那兵の死人が温になってくさるので、悪匂が鼻お切る様におおつて来るよ。全く戦地だね。揚子江のくろには死人の山で□のごとくだよ。一寸内地の人々が見たら驚くね。くさつてどろどろになって居るよ⁽⁵⁾」「安慶に行く途中の手紙では「爆弾が爆発して命中して支那の兵がコロコロと死んで行く様は全く面白く、人間の様では有ませんでした。見事な物だったよ⁽⁶⁾」とある。別の兵士の南京からの手紙から「当地方は戦略上土民も一人残らず銃殺した関係上、見渡す限りの沃野もあたら雑草の広野原と化し、見るも無惨な状態と化しています⁽⁷⁾。」と紹介している。また別の兵士の手紙から「毒瓦斯の研究をやつてゐる為、学課等も多い。毒瓦斯は秘密中の秘密になってゐる為ここに書くことを許されません⁽⁸⁾」と紹介している。さらに別の兵士の手紙から「戦場でなくては味ふことの出来ない事も数多く有ります。先づ強行軍を終へて夕方宿営地につくと徴発です。(もつとも隊長殿の許可がなくては徴発はできませんが)徴発と云つても鉄とか品物では有りません。之等は土民達にげる時に持つて行つて何も有りません。食物(さい)です。大きな

三十貫も有る様な豚をかついて来る者も有るかと思へば、おいしそうによくこえたにわとりをさげて来る者も有る。これをたちどころに料理して夕食のさいにする。」と紹介している。

これらを小池氏は「毎日殺していくなかで、それに慣れていつてしまう状況が、ここに示されている。」⁽¹⁰⁾「中国人を人間として見ない、見ようとしてない日本兵の姿がここにある。」⁽¹¹⁾「戦場に行った兵士たちが『殺人』をためらいもなく行うこと、その背景に中国人蔑視があることを示している。」⁽¹²⁾「『南京大虐殺』に郷土出身の兵が参加していたことを示す。毎日揚子江で二百人ずつ殺したという記述には戦慄を覚える。」⁽¹³⁾「寝る所もないのは、日本軍によつて家が破壊・放火されたからである。また厳しい食糧難も続いていた。」⁽¹⁴⁾「猛烈な死臭と腐乱した死体の様子が、短い文のなかに凝縮されている。」⁽¹⁵⁾「中国軍兵士が『コロコロと死んで行く様』を『面白い』と記す兵士。これが戦争だというのであるうか。」⁽¹⁶⁾「農民出身らしく荒れ果てた農地を氣遣う。しかしその原因は『土民』を一人残らず銃殺した結果であった。」⁽¹⁷⁾「日本軍兵士による徴発……が記されている。」⁽¹⁸⁾と解説している。

このうえで、小池氏は「検閲が厳しいといわれる軍事郵便に、戦地の具体的な状況を書き、かつ送ることがなぜできたのか。」⁽¹⁹⁾という課題に對して「家族や役場には、おそらく自らの『殺人体験』は記さないだろう。ここで取り上げた兵士の手紙は、郷里の仲の良い先輩に宛てたものである。だから赤裸々に書いたし、それは確実に配達されたのである。」⁽²⁰⁾「ではなぜ検閲を通つたのだろうか。……戦時下、中国人に對する強い蔑視により、中国人を殺すことに日本人は何の痛痒も感じないようになっていた。中国大陸で中国人を殺害することが当然視されていた時、手紙にそのようなことが書かれていてもチェックされることはなかったのではないか。」⁽²¹⁾と答えている。中国人を殺害することが当然視されていたことが、検閲でチェックされなかつた理由であるということはその通

りであると、私も考える。しかし、もう一点の、宛先により可能であったということについては、後でみるように小学校や青年学校の教師を務め、在郷軍人会の責任者であった高橋峯次郎あての軍事郵便にも、戦地の具体的な内容が書かれており、単に仲の良い先輩のみでなく、半ば公的な所にあてた軍事郵便でも、それが可能であったと広げて考える必要がある。

2 取り上げる軍事郵便の限定

以下、高橋峯次郎あて軍事郵便に書かれた戦場の様子を紹介していくが、ここでは高橋あてに多数の軍事郵便を出した兵士にしほり、その中で実際に戦場の様子を書いているものを見ていくこととしたい。それは具体的には、以下の人たちである。

高橋徳松は、一九三一年一月から満州派遣軍歩兵第三一連隊の機関銃中隊に属し、中国東北地方で戦闘や警備にあつていた。一九三四年に現地除隊し、熱河線凌源滿鉄自警隊本部に務めている。

千葉徳右衛門は一九三二年一月に入営し、一九三二年四月に中国東北地方へ渡り、満州派遣軍歩兵第三一連隊第六中隊に属し、義州の警備につき、一九三三年二月には連山に移り、さらに一九三三年一月一三日には古北口に移った。その間、討伐、掃討戦に参加している。古北口では毒ガスの専習員になって訓練を受けている。一九三四年四月に凱旋兵として除隊している。

菊池清石衛門は一九三七年度現役兵であり、中国東北地方に行き、一九四一年に帰郷している。

石川庄七は、一九三三年に召集され、弘前の歩兵第三一連隊に属して毒ガスの教育を受けているが、戦地には出ていない。その後再び、日中戦争勃発直後の一九三七年八月三十一日に充員召集を受け、第一〇八師団に属し北平（現、北京）を経て、中国本土の北部に入り、太原作戦、河

北戡定作戦、占領地の肅正作戦などに参加していた。一九三九年二月一日に帰郷した。

高橋千太郎も、一九三七年八月三十一日出発し、中国本土の北部で第一〇八師団に属して、太原作戦、河北戡定作戦、占領地の肅正作戦などに参加していた。一九三九年二月一日に帰郷した。

高橋徳兵衛も、一九三七年八月に出征し、中国本土の北部で第一〇八師団に属して、太原作戦、河北戡定作戦、占領地の肅正作戦などに参加していた。一九三九年一月に帰郷した。

菊池八兵衛は一九三八年八月から中国本土北部の戦場で第一〇八師団に属して肅正作戦に参加し、敗残兵・匪賊の討伐をしている。

加藤清逸は、一九三七年七月三十一日出発し、九月三日に天津に上陸し、北平へ行つたあと、中国本土北部の戦闘に参加した。一日には北平を出発し、保定会戦、石家荘作戦、太原作戦、河北戡定作戦、占領地の肅正作戦などに参加した。当初は第二〇師団に属していたが、一九三八年四月に第一〇九師団に配属になっている。その後中国本土の中部、南昌攻略作戦に参加し、入城後残敵の掃討をし、貴陽方面の討伐をしている。さらに中国本土の南部の南寧攻略作戦に参加し、占領後宣撫活動をおこなっている。

②軍事郵便に書かれた戦場

1 戦闘の様子

ここから、軍事郵便の実際の内容をテーマに分けて見ていくことにしたい。まず最初は特徴的な戦闘の様子から見ていこう。

中国東北地方の戦闘については、高橋徳松と千葉徳右衛門が軍事郵便に書いている。高橋徳松は、一九三一年二月二日付の葉書では「馬

賊のチャンコロさんが出没する。……偉大な機関銃で射撃すれば忽ち死の巷と化す。死んでも誰もかまつてくれぬ。支那主義。敵と言へ共哀れなものさ。」⁽²²⁾と書いている。一九三一年二月二三日付の書簡では「四方の敵兵もバタ／＼と死体を重ねるのではあった。」⁽²³⁾と書いている。

千葉徳右衛門は、一九三二年九月二日付の書簡では「南方に討伐に出かけました。……片端しから掃蕩始め、八時頃迄掛り七八の馬賊を生捕りして……両三の調査の結果確実なる馬賊なので此の時射殺してしまいました。」⁽²⁴⁾と書いている。また一〇月一三日付の書簡で、「十月八日に又歩三一の主力が出動し討伐がありました。……劉竜台の部落……学良系のパシータとかと云ふ者の引いた義勇軍が居つたのです。……其の山陰に又三ぼう堂子と云ふ処が有りまして軍旗を守る処の三大隊は汽車で朝陽寺迄進出し、敵の背面に宇回したのです。片端から掃討を始め小銃や槍などを押し収し九時頃に全く終りました。帰りがけに火を放つて帰途に就きました。……痛快でした。」⁽²⁵⁾と書いている。さらに、一〇月二日付の書簡では「去る十月十八日午後五時頃義勇軍の朱斎青の率い居る二千数百名が義州部隊を攻撃し来たりとの密偵の報告ありて、……敵に肉迫せしに、敵は総崩れとなり逃げ始めました。其の後は追撃に追撃、停車場より二里程も進出致しました。其の間ばかり／＼と倒れる有様の小気味よさ。」⁽²⁶⁾と書いている。

このように中国東北地方の掃討において、激しい攻撃をかけているが、そこでは中国人を蔑視しており、中国人が撃たれてばたばた倒れることを小気味よいと書いており、戦闘後に放火しているがこれも痛快と書いている。さらに捕虜も馬賊だという理由だけで殺害している。

つぎに、中国本土北部での戦闘では、石川庄七は、一九三七年一月二日付の書簡では「今度一月九日の午後二時より河北省の任県及南和間に戦闘開始されましたが、愈々参加致しました。何んだか実戦の気持ちはしませんでした。演習の様な気分が発射する弾を見て喜んで居る

様な訳でしたが、だん／＼と戦も烈しくなつて負傷者や死者が出来る様になつて来ましたら、始めて恐しくなつた様でした。内地で聞いて居つた様に支那兵は速く逃げません。仲々強固で吾軍をなやせました。」と書き、一九三八年二月七日付と思われる葉書では「警備と匪賊討伐に多忙を極めて居りますが、大した事もなく／＼三百、五百、千と帰順します。一番頑強なる敵は山西方面から集つた共産軍の敗残らしいのです。けれ共何千居つても恐ろしい気持はなく／＼攻撃します。……一人余さず殺ける事は出来ない様に思われます。」と書き、一九三八年五月七日付書簡では「今度の山西方面。戦闘は仲々の戦闘で、吾々老取兵としては出来過ぎた様でした。……突撃するものなく、逃げる支那兵此の時は五十米百米の間射撃、又突撃いや、十五六人やつけた。」と書き、一九三八年一月一日付書簡では「山西の南部、黄河に近き山に居つて警備致し居りますから、御安心下さい。此の山には敗残の巢でも敵はあちこちに集団致して居ります。九月以来大きな討伐も二三回ありましたが、」と書いています。

高橋千太郎は、一九三七年一〇月二四日付書簡では「敗残兵の討伐は十月初旬一回やりました。」と書き、一九三八年一月付書簡では「十月三十一日に行動を開始致したので御座います。先づ山西省大原方面の戦闘に参加すべく……任県城を占領日章旗を樹てた……附近に散在しある部落を掃蕩しつ、前進」と書き、一九三八年三月一日付の書簡では「第二期作戦の基に二月九日を期し北支西方なる山西省に在る有力なる支那第八路軍抗日共産軍脅撃滅の命を受け当師団は出動を開始しました。」と書き、一九三八年五月一日付書簡では「山西省に入つてから共産軍との対戦山岳戦」と書き、一九三八年六月八日付の葉書で「敵も去るものであります。」と書き、一九三八年一〇月二四日付書簡では「だが何しろ当山西省に入つてからは敵はがんだ強なものです。」と書いています。

高橋徳兵衛は、一九三八年五月六日付書簡で「同蒲線は毎日の様に鉄道破壊でわづか一ヶ大隊の兵力輸送に二十日間もかかつた。支那軍は白昼鉄道警備隊を襲撃して来る。今では京漢線の方も、やられる様になつた。」と書き、一九三八年五月一日付書簡で「来る途中、敵は部落に潜伏し居て大部隊の通過後、後方の車輛を襲撃し監視兵となつて居る我が第二中隊で死者一名重傷一名出した。九日目的地に着し、警備して居る。是れから討伐に出るでせう。前の守備隊は附近の討伐に出て民家を焼払つて来たので、其の人民は支那軍隊と連絡を取り毎夜やつて来ます。戦には負けられませんね。支那人の食物は絶へ木の葉をこき取り、亦青麦の穂をもぎ取つて手でもみ、のぎを落して食べて居ます。見るも悲惨なるものがあります。」と書き、一九三八年六月と推定される書簡では「山西は軍民一致、抗日は徹底して居りまして、部落民は居りません。」と書き、一九三八年一月一日付書簡では、「薪もありませんで、一里も二里も離れた部落に行き、支那家をこわして、運搬します。」と書き、一九三九年六月と推定される書簡では「私達の居るところは敵の真中でありまして、部落には一人居りません。……支那軍隊は毎日の様にやつて来るので、亦我軍も之に應戦し、正規軍であらうと、敗残兵であらうと、地方民であらうと皆射撃をするのであるから困るでせう。先日の中隊は攻撃前進の際、散開して前進したところは、畑で働いて居る地方民は逃場を失つて麦畑に、すくたまつて、ぶる／＼して居つた。女も居れば子供もある。でも、兵隊は気は張つて居るので罪のない女子供も殺して前進する。悲惨なものです。」と書いています。

菊池八兵衛は一九三八年一月一日付葉書で「只今は敗残兵匪賊の討伐をやて居りまして」と書き、一九三九年二月二日付書簡では「一月十日の大討伐に依り敵の戦死者の死体を見るに十五才位の若い方が沢山ありました。其時から敵は兵器を持つた者も半数にて、残りは手榴弾を持つて居り、」と書き、一九三九年五月三日付書簡では「丁度一ヶ月以前

の討伐には夜襲を以て敵を包囲致し戦鬪を開始致しました。敵の狼狽此の上も無く逃げまどう処を重機軽機の掃射にて将棋倒しにバタ／＼と倒れる、此の面白き事例へる物は有りません。此の時の捕虜約式十名（十五才の者式名、十七才の者式名）居りました。其の外有力者も多数有りました。⁽⁴⁴⁾と書いています。

つぎに、加藤清逸は、最初は中国本土北部におり、一九三八年三月一七日付書簡では「靈石などは字の如く険しい山岳地帯で敵は其の頂上に強固なる陣地を築き、我が軍をつるべ射に仕様とがんばり居りました。

……鉄道道路は殆んど破壊され、交通は遮断され、手紙どころか、糧秣も十分でないのだ。⁽⁴⁵⁾と書き、一九三八年四月一七日付書簡では「何せ毎日の戦鬪行軍で……汾陽と言ふ所に着きました。茲に一泊すぐ又行軍にて討伐に出発しました。何れ此の山西は山国でどこへ行つても山ばかり水なく薪木なく非常に難儀しました。又所々に共產軍、敗残兵など居り、数回の襲撃を受けました。」⁽⁴⁶⁾と書き、一九三八年六月二十九日付書簡では「汾陽にて……私等の茲に来た時は敵もたくさん……したが、今は殆んど平穏ですが、まだ……離石と言ふ所に討伐に出てみます。……時々便衣隊のため破壊されます⁽⁴⁷⁾」と書いています。

その後中国本土中部に移動した後では、一九三九年四月一六日付の葉書に「三月二十七日南昌入城致しました。此の攻撃も攻撃も相当の激戦にて、殊に敵前渡河は多数の死傷者を出しました。あの暗夜に敵弾雨の如く飛び来る中を小舟にて渡河の時は全く生きたる気持はありませんでした。南昌には……部隊に配属になり、一番乗りでした。入城当時は残敵多く二十七八九日は残敵掃討致し。……新聞雑誌には戦鬪一段落などあるが、一線はどこに行つても敵だらけです。」⁽⁴⁸⁾と書き、一九三九年六月三日付葉書では「私等は三月以降今まで貴陽方面の大討伐に出てみました。……今は漢口西北方約百里〇〇城内の警備をしてゐます。茲は敵前二千米の地点で毎日銃声は絶えませんが。附近には密偵などもうるさく

警備と言ふても戦地と同じであります。」⁽⁴⁹⁾と書き、一九三九年八月二五日付書簡では「討伐に出ました。……敵は相当多く仲々の苦戦でした。……或る時は敵に包囲され相当死傷者を出しました。……今の敵は敗残兵ですが、山の中では実に強く突撃せぬ内は逃げません。日本兵も強いが、支那兵も相当がんばります。……あれ位の討伐では敵もびくともしない。……毎日の様に敵が出て鉄道道路など破壊され、汽車も時々通行出来ず、糧秣も続かぬ事があるそうです。何れまた近い内に大討伐ある事でしょう。」⁽⁵⁰⁾と書いています。

このように、日本兵が女性・子供を含む中国住民を殺害したり、住民の家を焼き払ったり、住民の財産を略奪するとともに、敗残兵を討伐し、逃げる中国兵を射撃・突撃していることも見られる。このような日本軍の行為が中国軍と住民の結びつきを強めていることも見られる。そして、日本兵が先入観を持って蔑視していた中国人の軍隊が、八路軍をはじめ日本軍に対して強固に抵抗している様子も見られる。八路軍などの抵抗が強く、日本軍がおさえられている鉄道などを破壊し、日本軍の補給がままならないことも見て取れる。また、警備や敗残兵の討伐といつても本格的な戦鬪となつていくことがわかる。さらに、日本の農民兵には、重機軽機の掃射で中国人がバタバタ倒れることを、例えるものがないほど面白いと思つている者もいることがわかる。また中国人の悲惨な様子を見て、戦には負けられないという考えを持つていることも見て取れる。

2 廃墟になった都市

つぎに日本軍によつて爆撃や攻撃された都市などの様子をあげてみよう。

加藤清逸は一九三七年九月五日の葉書に「天津に着いたのは九月三日午後なり、当市大分大きい所なりしも、大なる建物は爆撃の為焼け残り、

惨たるものなり。……途中列車橋など爆撃され、焼残れるあり。列車は九月四日当豊台駅に着いた。茲もそうとうやられたる跡とあり。」と書き、一九三九年二月二日付書簡には「南寧……入城当時は住民も一人もなく、あちこちに支那兵の死体にて、まるで死の都なりし、」と書いている。

高橋千太郎は一九三七年一〇月二四日付書簡で「北支到着最初戦場を通過 聞きしに勝る戦場の跡、殊に人馬の死体など臭気にむせびつ」と書き、一九三八年三月一五日付の書簡では「戦乱に化した北支の状態などは実に悲惨の極度に達せるものがあります。幾何万の人口に対する大都市も一人の住民の影もなく、犬子一匹もさへ居らざる所一二箇所ではありません。我が皇軍のために主なる建物は破壊され、子は親と離れ、妻は夫を失い、財は其の儘放棄し、死体は山を築き臭気ハナを突く感があります。……家屋は申すまでもなく諸道具までも焼き盡され、鍋釜かめの類などは打破され見る惨々たるものであります。」と書いている。

このように天皇の軍隊・皇軍である日本軍の攻撃・爆撃により、中国の都市や鉄道沿線などが、死の町のように建物や道具が破壊されたり、焼かれたりして廃墟となり、中国人の死体が放置されており、中国人の住民の生活が破壊されている様子が書かれている。

3 日本軍の占領地支配

ここで、日本軍の中国占領地支配について書かれたものを見ていこう。

千葉徳右衛門は、一九三二年九月二二日付の書簡では「……去る十八日は事変突発第一週年記念日……日の丸と満州国の五色の旗と二つを持った支那人行列が在りました。彼等顔には酷使される軍閥より免れ、権利義務の平等を得たる喜の色が漲ぎつて居りました。」と書いている。

菊池清右衛門は一九四〇年四月一三日付葉書で「当地に住める満人も

大分日本人化して殆んど異国に在るの感ありません。」と書いている。

石川庄七は一九三七年一〇月四日付書簡で「北平市民は非常に皇軍を歓迎して呉れます。……建国の時期近し」と書き、一九三七年一月二一日付の書簡で「早く殺つて決着を見たいのが吾々です。北支独立を早からん事を期待して居ります。」と書き、一九三七年二月二八日付書簡で「北支も今は楽土に近く、逃げて居ない土民も日本軍の情を知り、八九分通りも帰つて来て居ります。」と書き、一九三八年二月七日付と推定される葉書では「今は北支も一日と五色の旗は各戸口に輝いて平和を物語つて居ります。又皇軍は喰べる事の出来ない困る者を集め援助する事になって場所も出来て居ります。」と書いている。

高橋千太郎は年月日不明の書簡で「鮮人の多くは我が軍に依りて辛じて生活の姿を得るもの多く」と書き、一九三八年五月二八日付書簡では「今や当北支方面の戦闘は一段落とは申しながら、敗残兵や便衣隊は不良支那人の横行止まず、私共警戒線の鉄道破壊は夕べもありました。……新政府の巡捕と協力して楽土北支の建設に鉄槌を打ちおろして居ります。」と書いている。

菊池八兵衛は一九三九年五月三日付書簡で「皇軍の宣撫に依り王道楽土化し土民は皇軍に感謝しつ、帰来、生業にいそんで居ります。今じや土民も敵兵（敗残兵）現れば我軍に報導し、我軍の討伐を待つ様に成りました。」と書いている。

加藤清逸は一九三八年一月七日付書簡で「今は支那人も我々日本□□対し厚意を持つて来ました。又我々も支那良民に対し□□皆愛護しています。……当北支には今は新政府治安維持会など設立し、……今は新年とて各門毎に国旗門松など立てられ内地と殆ど変りなく異国とは思われぬ程です。」と書き、一九三八年六月二九日付書簡では「日本軍を頼みとし、敗残兵便衣隊……軍に報告してくれませう。こんな様ですから、支那農工商民共心から信頼し尊敬してゐます。我々入城当時は住民一人も

居なかつた汾陽城内も今はとても賑かです。時々内地や支那人の慰問団が来て活動、芝居、踊、万才などを催してくれます。……石家荘など殆んど日本町と変わりありません。日本人は半分位入り、商店を開いてゐます。……どの村に行つても日本軍の居ない村はありません。⁽⁶⁵⁾」と書き、一九三九年二月二日付書簡では「南寧……我が軍の為宣撫が行われ町も清掃されたし、住民も毎日群をなして帰宅して居り、今日は約一万人以上も居るそうです。我々も今は討伐もなく、毎日道路修理、飛行場の工事等、今は殆んど宣撫、建設に従事してゐます。今の戦争は占領するとすぐ宣撫班が入り、特務機関が入り、建設運動と実にうるさくなりました。其れがため、徴発も禁じられるし、糧秣も統かぬ。今は南京米に塩汁です。」⁽⁶⁶⁾と書いています。

このように、日本の中国占領地支配が当初は破壊と略奪であつたと、そしてその後の支配は日本軍の軍事力で維持されていること、日本軍のいいなりになる「満州国」、華北の政権や治安維持会などをつくる形で支配しており、占領地が日本の植民地のように日本化させられていること、そしてそのような性格の「復旧」がなされていることを読みとれる。

4 毒ガス戦の準備

ここでは、毒ガス戦そのものを実施している記述はないが、そのための訓練や教育をしていることを見ていこう。

石川庄七は一九三三年三月一日付消印の葉書で「吾等十五日間召集兵は瓦斯中隊で毒瓦斯教育で、主として学科半分、防毒面装脱等の演習、分隊小隊の行進中の諸動作ばかりで、現役当時の練習は少も致しません。瓦斯を使用し、それを防毒面で除くか、消毒剤に依つて防護するか等」⁽⁶⁷⁾と書き、一九三三年八月六日付消印の葉書では「今般の召集人員百十二名、主として毒ガスの研究で学科七分の様子に御座候」と書いて

いる。

千葉徳右衛門は一〇月一六日付書簡で「去る十月十三日よりは両が古北口に参りまして、目下八釜敷叫ばれる化学兵器たる『ガス』專習員を命ぜられまして修業致し居ります。余りに複雑なこと計りで、浅学なる千葉には無理過る程です。……防毒用具としては九一式防毒面及防毒衣袴。これには手袋靴まであります。何れも『ゴム』製です。未だ公表許され無い処の最新式で列国に比しても誇るとも劣らぬ物と聞いて居ります。『ガス』にも直接障りもし、催涙性の如きは目より涙が出、又咽喉を刺戟するのです。仲々偉いものです。その反面には秘密の保持上專習員さへにも筆記を許さない処もあります。期間は十五日間です。来るべき戦場に化学の力を利用し、『ガス』兵として先輩の残せる三十余年昔の誉ある歴史を偲び、今次の予想敵国も又国土を同じうする彼等と両度の決戦を試みん日が待遠しい思すら致します。……千葉は第二回目的修業兵であります。」⁽⁶⁸⁾と書いています。

このように日本軍が国際法違反を知らながら、密かに毒ガス戦をおこなうことを考え、そのための実際的な開発・訓練・教育をおこなっていることがわかるし、農民兵士が毒ガス戦をしたいと意思表示をしていることも読みとれる。

③おわりに―軍事郵便に見られる農民兵士の考え

ここでは、日本の戦争目的などについてどう書いているか見ていこう。

高橋徳松は一九三四年一月一七日付書簡で「王道楽土の満州帝国は今や世界に誇り得る権利と帝国布設に達し、益々曙光に辿り一点の雲だになき晴天の大満州帝国とはなり、それに住む我々邦人の喜悅なる事よ。」⁽⁷⁰⁾と書いている。

千葉徳右衛門は一九三三年一月一日付書簡で「たかゞ知れたチャンコロ如き、我れに正義の利剣と九千万同胞の厚き信頼を負へるなり。身はたとへ満蒙曠野の野露と消ゆる共、国護る心は更に変わるまじ覚悟なのです。」と書いている。

高橋千太郎は一九三八年三月一日付の書簡で、「戦争中逃げ後れた支那兵の婦女子は土穴にかくれ、吾等皇軍を見る如く、土に伏して手を合せお許し下されよと言ふが如く、泣いて――拜んで居る有様は、我々も同じ人間であり、若しや当支那国に生を受けたなら斯様な悲惨極るところのうき目に合ふも免れ得ないのである。我々は幸ひにして皆様と生を大日本帝国に生れ合はし、世界各国に比なき国体を有しつ、がなぐ暮し居る幸福さよ。」と書いている。

菊池八兵衛は一九三八年八月二三日付書簡で「昨夏出動以来茲に一年の戦場往來を顧みて感慨無量のもの有之候。東亜永遠の平和確立の爲には此際徹底的に彼等の迷夢を打破する事肝要にて」と書いている。

このように農民兵士たちは、日本軍がおこなう戦争を正当化するイデオロギーをそのまま受け入れて、疑うことなく、そのまま書いていることがわかる。また、先に見たように日本軍の中国人殺戮などを「小気味よい」「痛快」「面白い」と書き表しており、日本軍により被害を受けた中国人を見ても、中国人を蔑視し、中国人は哀れだと書くだけで、日本人として天皇制国家・大日本帝国に生まれたことを喜んでゐる。そこから、戦争に負けると悲惨であり、戦争に負けてはいけないという考えを表明している。もちろんここに見る農民兵士の意識が、すべての兵士のものであったとは言えないが、さきに紹介した先行研究も踏まえて考えると、普遍性を持ったものであったとは言える。

最後にまとめると、農民兵士の軍事郵便からも、日本の中国への戦争が侵略戦争であり、それによって、中国の人びとに多大な災難、損害と苦痛を与えたものであり、また戦争犯罪もあつたことがわかれると言え

る。さらにその侵略戦争を農民兵士が遂行にあたつており、その正当化を疑うことなく、受け入れたことも見ることができると。

註

- (1) 『静岡県近代史研究』第二四号(以下「研究」と略す)一三三ページ。
- (2) 「研究」一三三～四ページと『浅羽町史』資料編三近現代(以下「資料」と略す)四五五ページ。
- (3) 「研究」一一四ページと「資料」四五六ページ。
- (4) 「研究」一一五ページと「資料」四五九ページ。
- (5) 「研究」一一六ページと「資料」四六〇ページ。
- (6) 「研究」一一七ページ。
- (7) 「資料」四五七ページ。
- (8) 「資料」四六三ページ。
- (9) 「資料」四六五ページ。
- (10) 「研究」一二三ページ。
- (11) 「研究」一二四ページ。
- (12) 「資料」六一一ページ。
- (13) 「資料」六一一ページ。
- (14) 「研究」一一五ページ。
- (15) 「研究」一一六ページ。
- (16) 「研究」一一七ページ。
- (17) 「資料」六一一ページ。
- (18) 「資料」六一一ページ。
- (19) 「研究」一二四ページ。
- (20) 「研究」一二四ページ。
- (21) 「研究」一二四～五ページ。
- (22) 一九三二年二月二日付、満州派遣軍第八師団歩兵三二連隊第二機関銃中隊高橋徳松、高橋峯次郎宛葉書、「農民兵士の声がきこえる」二五～二六ページに翻刻、しかし「チャンコロ」「支那」などは省略されている。
- (23) 一九三二年二月三日付、満州派遣軍第八師団歩兵三二連隊第二機関銃中隊高橋徳松、在郷軍人分会内高橋峯次郎宛書簡、「農民兵士の声がきこえる」二六～三〇ページに翻刻。
- (24) 一九三三年九月二日付、満州派遣軍第八師団歩兵第三二連隊第六中隊千葉徳右衛門、高橋峯次郎宛書簡。

- (25) 一九三二年一〇月三日付、満州派遣軍第八師団歩兵第三一連隊第六中隊千葉
徳右衛門、高橋峯次郎宛書簡。
- (26) 一九三二年一〇月二二日付、満州派遣軍第八師団歩兵第三一連隊第六中隊千葉
徳右衛門、高橋峯次郎宛書簡。
- (27) 一九三七年一月二二日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄七、
高橋峯次郎先生宛書簡。
- (28) 一九三八年二月七日付(推定)、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄
七、高橋峯次郎先生宛書簡。
- (29) 一九三八年五月七日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄七、高橋
峯次郎先生宛書簡。
- (30) 一九三八年一月一日付、北支派遣軍谷口部隊米岡部隊岩淵隊石川庄七、高
橋峯次郎宛書簡。
- (31) 一九三七年一〇月二四日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊
高橋千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (32) 一九三八年一月付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高橋千太
郎、高橋峯次郎外学生御一同宛書簡。
- (33) 一九三八年三月一日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高
橋千太郎、後藤尋常小学校生徒諸君宛書簡。
- (34) 一九三八年五月一日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高
橋千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (35) 一九三八年六月八日付、北支派遣軍谷口部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高橋
千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (36) 一九三八年一〇月二四日付、北支派遣軍谷口部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊
高橋千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (37) 一九三八年五月六日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊井村隊川原田隊高橋徳
兵衛、高橋峯次郎宛書簡、『農民兵士の声がきこえる』五六ページに翻刻。
- (38) 一九三八年五月一日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊川原田隊高橋徳兵衛、
高橋峯次郎宛書簡、『農民兵士の声がきこえる』五六～五七ページに翻刻。
- (39) 一九三八年六月(推定)、北支派遣軍谷口部隊中村静部隊井村隊川原田隊高橋
徳兵衛、高橋峯次郎宛書簡。
- (40) 一九三八年一月一日付、北支派遣軍谷口部隊米岡部隊川原田隊高橋徳兵
衛、高橋峯次郎宛書簡。
- (41) 一九三九年六月(推定)、北支派遣軍谷口部隊米岡部隊川原田隊高橋徳兵衛、
高橋峯次郎宛書簡、『農民兵士の声がきこえる』六一～六三ページに翻刻、しか
し「でも、兵隊は気は張って居るので罪のない女子供も殺して前進する。」の部
分は省略されている。
- (42) 一九三八年一月一六日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊本部菊池八兵
衛、高橋峯次郎宛書簡。
- (43) 一九三九年二月二日付、北支派遣軍谷口部隊米岡部隊中村覚隊本部菊池八兵
衛、高橋峯次郎宛書簡、『真友』一九三九年三月号で紹介。
- (44) 一九三九年五月三日付、北支派遣軍谷口部隊井上部隊清水部隊本部菊池八兵
衛、高橋峯次郎宛書簡。
- (45) 一九三八年三月一七日付、北支派遣軍山岡部隊気付赤間部隊深谷隊第二小隊加
藤清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (46) 一九三八年四月一七日付、北支派遣軍山岡部隊気付赤間部隊深谷隊阿へ隊加藤
清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (47) 一九三八年六月二九日付、北支派遣軍山岡部隊気付赤間部隊深谷隊第二小隊加
藤清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (48) 一九三九年四月一六日付、中支派遣軍岡村部隊気付赤間部隊東畑隊加藤清逸、
高橋峯次郎宛書簡。
- (49) 一九三九年六月三日付、中支派遣軍岡村部隊気付赤間部隊東畑隊加藤清逸、高
橋峯次郎宛書簡。
- (50) 一九三九年八月二五日付、中支派遣軍岡村部隊気付赤間部隊東畑隊加藤清逸、
高橋峯次郎宛書簡。
- (51) 一九三七年九月五日付、北支派遣軍迫撃第三大隊第一中隊二小隊加藤清逸、高
橋峯次郎宛書簡。
- (52) 一九三九年一月二二日付、南支派遣軍今村(均)部隊気付赤間部隊東畑隊加
藤清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (53) 一九三七年一〇月二四日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊
高橋千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (54) 一九三八年三月一日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高
橋千太郎、後藤尋常小学校生徒諸君宛書簡。
- (55) 一九三九年九月二二日付、満州派遣軍第八師団歩兵第三一連隊第六中隊千葉徳
右衛門、高橋峯次郎宛書簡。
- (56) 一九四〇年四月一三日付、北滿阿部部隊菊池清右衛門、高橋峯次郎宛書簡。
- (57) 一九三七年一〇月四日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄七、高
橋峯次郎先生宛書簡。
- (58) 一九三七年一月二二日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄七、
高橋峯次郎先生宛書簡。
- (59) 一九三七年一月二二日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄七、

- 高橋峯次郎先生宛書簡。
- (60) 一九三八年二月七日付(推定)、北支派遣軍下元部隊中村静部隊岩淵隊石川庄七、高橋峯次郎先生宛葉書。
- (61) 年月日不明、高橋千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (62) 一九三八年五月二八日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高橋千太郎、高橋峯次郎宛書簡。
- (63) 一九三九年五月三日付、北支派遣軍谷口部隊井上部隊清水部隊本部菊池八兵衛、高橋峯次郎宛書簡。
- (64) 一九三八年一月七日付、北支派遣軍川岸部隊氣付赤間部隊深谷隊第二小隊加藤清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (65) 一九三八年六月二九日付、北支派遣軍山岡部隊氣付赤間部隊深谷隊第二小隊加藤清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (66) 一九三九年一月二一日付、南支派遣軍今村(均)部隊氣付赤間部隊東畑隊加藤清逸、高橋峯次郎宛書簡。
- (67) 一九三三年三月一日消印、弘前歩兵第三一連隊後備兵第一中隊石川庄七、高橋峯次郎・及川長太郎宛葉書。
- (68) 一九三三年八月六日消印、弘前歩兵第三二連隊後備兵第一中隊三班石川庄七、高橋峯次郎宛葉書。
- (69) 一〇月一六日付、滿州派遣軍第八師団歩兵第三二連隊第六中隊千葉徳右衛門、高橋峯次郎宛書簡。
- (70) 一九三四年一月一七日付、滿州派遣軍第八師団歩兵第三一連隊乘馬隊高橋徳松、在郷軍人分会高橋峯次郎宛書簡。
- (71) 一九三三年一月一〇日付、滿州派遣軍第八師団歩兵第三一連隊第六中隊千葉徳右衛門、高橋峯次郎宛書簡。
- (72) 一九三八年三月一五日付、北支派遣軍下元部隊中村静部隊中村覚隊佐藤佐隊高橋千太郎、後藤尋常小学校生徒諸君宛書簡。
- (73) 一九三八年八月二三日付、北支派遣軍谷口部隊中村部隊中村覚隊本部菊池八兵衛、高橋峯次郎宛葉書。
- (74) 岩崎稔著『或る戦いの軌跡―岩崎昌治陣中書簡より』(一九九五年六月九日、近代文芸社刊)にも、南京事件前後の日本軍の行爲を書いた軍事郵便が収録されている。そこでも、日本軍兵士が敗残兵や、女性・子どもを含む中国住民を殺害し、住民の家が焼かれていることが書かれており、兵士が敗戦國民を哀れんでいることも書いている。

(立命館大学国際平和ミュージアム、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇二年四月一〇日受理、二〇〇二年六月六日審査終了)

The Soldier and the Battlefield, as Seen in Military Mail

YAMABE Masahiko

As part of an analysis of military mail addressed to TAKAHASHI Minejiro, this paper attempts to shed light, through the study of military mail, on the actions taken at the battlefield by soldiers in the war with China and the views harbored by these soldiers regarding the war. Previous research regarding military mail addressed to TAKAHASHI Minejiro focused on the angle of the farmer-soldier, illustrating the soldiers' views on the lives of the Chinese farmers who lived on the land where the battles were fought. The aspect of the soldiers with regard to their participation in the war between Japan and China, therefore, was left for further research to unveil.

Previously, it was believed that censorship prevented writers from expressing their true thoughts in military mail. Recently, however, a study published by KOIKE Yoshiyuki dealing with military mail in Asaba town in Shizuoka Prefecture revealed evidence in military mail of guilt in the war of aggression. One of the objectives of this paper is to further expand on the results of the above research.

This paper introduces the state of combat, as depicted in military mail correspondence sent by TAKAHASHI Tokumatsu, CHIBA Tokuemon, KIKUCHI Seiemon, ISHIKAWA Shohichi, TAKAHASHI Sentaro, TAKAHASHI Tokubei, KIKUCHI Hachibei, and KATO Seiichi.

Regarding the state of combat, the letters reveal how Japanese soldiers killed Chinese citizens, including women and children, and prisoners and stragglers, burnt the people's houses and plundered them of their belongings. On the other hand, the letters also show how the Chinese army, who were looked down upon by the Japanese, strengthened ties among the Chinese people and put up a fierce resistance. In addition, there are descriptions of cities, devastated from the attacks and bombing by the Japanese army, with dead bodies left lying in the streets, and accounts of how the Japanese army maintained control of the occupied territories by use of military force, establishing a puppet government and "Japanizing" the territories, as if they were Japanese colonies. There is also indication of the army preparing for poison gas warfare. In this way, the military mail sent by the farmer-soldiers provides evidence that Japan's war with China was in fact a war of aggression, inflicting an enormous amount of misfortune, damage, and pain on the people of China, with war crimes also being committed.

The military mail also reveals that the farmer-soldiers accepted without question the ideologies put forth by the Japanese army to justify the war, that they enjoyed killing Chinese soldiers and other such acts, that they regarded the Chinese as being miserable, that they were glad to be born Japanese, and that they believed that they had to win the war.
